

ピーター・タウンゼント作・間庭恭人訳 『ナガサキの郵便配達』を読む

——重ね合わされた二つの声——

田崎 弘章

はじめに

チャールズ・スウィーニーが死んだ。二〇〇四年（平成十六年）七月十九日の朝日新聞社会面は、北朝鮮拉致被害者・曾我ひとみさん一家の帰国と、佐世保で起きた小学生による同級生殺人事件被害者・御手洗恰美さんの「お別れの会」を、大きく取り上げている。その片隅に、彼の死亡記事は、小さく出ている。

長崎原爆投下を指揮

チャールズ・スウィーニーさん（長崎原爆を投下したB29爆撃機の機長 AP通信によると、15日、米マサチューセッツ州ボストンの病院で死去、84歳。死因は明らかにされていない）。

陸軍少佐だった45年8月9日、長崎原爆投下作戦を指揮し、B29爆撃機「ボックスカー」を操縦した。同日6日の広島原爆投下でも、原爆を投下した「エノラ・ゲイ」とともに現地上空を飛行するなど、広島、長崎の両作戦に直接

かかわった。

戦後は原爆投下を擁護する発言を繰り返し、著書「私はヒロシマ・ナガサキに原爆を投下した」では原爆投下こそが戦争を終結させたとする持論を展開した。（共同）

この記事の中に出てくる「私はヒロシマ、ナガサキに原爆を投下した」という本は、二〇〇〇年七月、原書房から翻訳出版された。原題は「War's End（戦争の終わり）」（一九九七年）である。この本について触れておく。

販売促進のために刺激的な邦題を付けるのは、翻訳出版や洋画配給の業界では珍しくないことであり、目くじらを立てても仕方のないことであるが、「原爆」に関する海外作品の翻訳には、考え込まれる改変が目につくように思う。（アラン・レネ／マルグリット・デュラスの映画「ヒロシマモナムール（ヒロシマ我が愛）」が「十四時間の情事」と邦題されたことをどう考えればよいのか）

「私はヒロシマ、ナガサキに原爆を投下した」という邦題は、事実在即したものであり、決して嘘ではないのだが、本書の内容とは大きなズレがあるように思えてならない。例えば書店でこの邦題を目にした時、日本人読者の多くは、元アメリカ軍人による「告白」「悔恨」「懺悔」といった文章を期待するのではないだろうか。しかし、内容は、原題「War's End（戦争の終わり）」が明白に示すとおりのものでしかない。著者スウィーニーは、こう記している。「私は爆撃したことについて、後悔も罪悪感も感じなかった。後悔と罪悪感を抱くのは日本の国家のはずであり、偉大なる野望を達成するために国民の犠牲を惜しまなかった軍の司令

官たちこそが、とがめられるべきであった。私と乗務員が長崎に飛んだのは戦争を終わらせるためであって、苦しみを与えるためではなかった。」そして、「もう二度と原爆投下作戦が行われないことは、私の心からの願いである。第二次大戦について学ぶ未来の世代など多くの人々にこの本を提供したい。」とまとめている。要するに、自らが行なった原爆投下という行為こそが、太平洋戦争を終結させ、その後も核戦争抑止力として働き、全面的な世界大戦の終わり「War's End」を実現させたのだということを力説しているのである。

しかし、この書物は、一方では、チャールズ・スウィーニーが何としても自らの行為を正当化しなくてはならなくなった背景の存在を感じさせる。それは、八十年代に高まった反核運動のうねりであり、その結果、多くの人々が核兵器使用を絶対悪と見なすようになった事実であるの言うまでもないだろう。

× × × × × × × ×

八十年代には反核をテーマとした小説・映画等が数多く発表された。その中のひとつに、一九八四年、英仏両国で発表された『ナガサキの郵便配達』という小説がある。その作品には、スウィーニー本人が実名で登場、原爆投下という大罪に深く関った者の一人として描かれている。『ナガサキの郵便配達』の作者はピーター・タウンゼント、第二次世界大戦初頭に活躍した英国空軍の元大佐である。連合国側の空軍パイロットとして一括りに見れば、一時はスウィーニーと同じ立場にあったということになる。

タウンゼントは、スウィーニーが『War's End』を発表する二年前の一九九五年に亡くなっている。

I. 読みさした教科書版『ナガサキの郵便配達』

二年前、三省堂「新編国語総合」の教科書を手にするまで、私は不覚にも、ピーター・タウンゼントの『ナガサキの郵便配達』という作品を読んだことが無かった。この作品は、反核運動が高まりを見せていた一九八五年、早川書房から、翻訳刊行されている。長崎で中高生対象夏休み課題図書に指定されたこともあり、八十年代後半には、書店の棚に並んでいるのを私も見た記憶がある。しかし、いつしか店頭から姿を消し、私はこの本の存在を忘れていた。

二〇〇二年、初夏、私は三省堂から授業案集に原稿を書くように依頼され、編集の方と打ち合わせをしている中で、『ナガサキの郵便配達』は、今、三省堂の国語教科書でしか読めない」という話を聞いた。三省堂は旧版の「明解国語I」の時から、この作品を取り上げているという。毎夏、恒例のように井伏鱒二『黒い雨』や林京子『祭りの場』『ギヤマン・ビードロ』といった教科書定番の「原爆文学」作品を授業で取り上げていた私は、イギリス人が書き、文部科学省検定教科書に採録されている原爆小説に新鮮さを感じつつ、読み始めた。

ピーター・タウンゼントという名前を見れば、私の世代は、恐らく大半の者が、ロックバンド「ザ・フー」のメンバーであった

ピートを思い浮かべるに違いない。ロック・オペラ『トミー』とそのテーマ『ピンボールの魔術師』に胸を熱くした記憶は、今も鮮明である。私は、教科書初見の時、片仮名表記の「ナガサキ」と、いかにも英国人らしい作者名を見つめながら鼻を鳴らし、まさか、あのピートが、この小説を書いたわけではないよな、と苦笑した。だから、教科書本文を読み始める前に、まず作品末に略記されている作者のプロフィールを一瞥した。そこには、温厚そうな白人の老人の写真に添えて、次のような文章が記されていた。

ピーター・タウンゼント (Peter Townsend) 一九一四 (大正三) 年〜一九九五年 (平成七) 年

イギリスのジャーナリスト。空軍大佐。王室侍従武官。戦争の犠牲になつた子どもやベトナム難民に取材した作品がある。

本文は『ナガサキの郵便配達』によつた。

英国人の生没年を元号表記する教科書編集者のセンスに、多少の違和感を覚えながらも、こちらのピートもどこかで見た記憶がある、と微かに引つ掛かるものがあった。

普段なら、作者について少しばかり不明なところがあつても、何はともあれ、まず本文を読み始めるのだが、この作品については、第二次世界大戦中、連合国側の軍籍にあつた人物が「ナガサキ」の原爆被害について小説を書いているということもあり、作者が何者であるのか、ある程度の知識を得なければ本文を読み始められないような気がした。

すぐに「ピーター・タウンゼント」、「空軍大佐」のキーワードで、ネット上の検索をかけてみたところ、気になっていた引つ掛

かりは瞬く間に氷解した。夥しい数の情報がヒットした。確かにこの人物なら二、三度新聞等で目にしたことがあつた。エリザベス英国女王の妹、マーガレット王女との悲恋で知られる高名な撃墜王。映画『ローマの休日』でグレゴリー・ペック演ずる新聞記者ジョー・ブラッドレーのモデル。一九四〇年夏、ナチスドイツとの英本土航空決戦（バトル・オブ・ブリテン）において、戦闘機ハリケーンを駆つて祖国防衛に獅子奮迅の働きをした英雄。戦後は車で世界一周のドライブを敢行した冒険家にしてジャーナリスト。二十世紀中盤のマスメディアを大きく賑わわせた人物である。（もちろん、ザ・フーのリーダー、ピート・タウンゼントとは別人である。が、映画『トミー』の冒頭で、主人公トミーの母親の情夫に撲殺されるトミーの実父は、第二次世界大戦中、ドイツ空軍と闘つた航空隊長ではなかつたか。この符合は偶然なのか？ザ・フー？）

作者のプロフィールを知り、私はますます興味をそそられながら、『ナガサキの郵便配達』を読み始めた。現在も「原爆青年乙女の会」「核実験に抗議する長崎市民の会」「長崎原爆被災者協議会」等々で精力的に活動を続けておられる谷口稜暉氏の被爆体験およびその前後の人生をなぞるようにストーリーは展開する。ディテールが細かく書き込まれており、作者の真摯かつ熱心な取材の跡が感じられる。だが、谷口氏の被爆体験とその後の人生は、確かに非常に痛ましく、辛い物語ではあるが、長崎に育ち、幼い頃から平和教育を受けてきた者にとっては、誤解を恐れずに言えば、幾度も目にしたり、耳に聞いたりしたことのある馴染み深いものでもある。素材のままでは、「小説」としての「ノヴェル」

ちは、稜嘩さん、また明日ね。」

その時突如として子どもたちが、彼の周りのすべての物が、家々も木々も、すべてが、かつて人間の耳が聞いたことのないすさまじい轟音を伴った、巨大なアーク灯から発せられた目の眩む閃光、青白色の恐るべき輝きの中に消えた。生き残った人々はこの激しい爆発を長く忘れることができなかつた。これを「ピカドン」と呼んだ。すべてが灰塵と暗黒に帰した。大旋風より激しい爆風が稜嘩の体を持ち上げ大地にはたきつけた。彼は暗やみの中で一瞬、小さな白っぽいものを見た。それはまるで秋風で木の葉が吹き払われ、風がやんでじつと動かなくなつたかのものであつた。彼が地上に落下する前に、小石が一つ、砲弾のような激しい力で彼の背中を打つた。彼はびくとも動けなかつた。自分は生きているのだろうか死んでいるのだろうか、という思いが頭をかすめた。体に異常を感じた。自分が倒れている地面がぐらぐら揺れているのだ。だがすぐに、恐怖にとらわれた。結局はあと何秒かすると自分も路上で野垂れ死にするのではないだろうかと恐れたのだ。しかし生の本能が勝つた。稜嘩は氣力を奮い、声に出してつぶやいた。「いやだ、死ぬもんか、死ぬのはいやだ。」なんとか意識をはつきりさせようとしていると、高空を飛んでいる飛行機の爆音がかすかに聞こえてきた。予備燃料も少なくなつてきたあの「ボックス・カー」が基地へと向かつて飛んでいたのだ。乗員たちは、完璧に任務を達成したことを祝い合つていた。だれかが機内通話装置でピーハンに大声で話しかけた。「おい、ビー、おまえ、一発でばつち

りジャップを十万人殺つたところだ。」この十万人の犠牲者の中に、風に払われた葉っぱのような、あの白いものもあつた。白っぽいものは、たつた数分前に楽しそうに稜嘩にあいさつすることはをかけた、あの白シャツ姿の子どもたちだつた。

(※傍線・田崎)

この箇所について、まず少し個人的なことを書く。それは本文を読みさした直接の原因であるからだ。

私は長崎市の北部で育つた。「住吉神社に通ずる細い道」は、私も子どもの頃の遊んだ所であり、夏には「白シャツ」を着て、友達と一緒に幾度も通つてゐる。私の場合、それがたまたま「昭和四十年代」だつたということである。「昭和二十年八月九日十一時」そこに居合わせたならば、「風に払われた葉っぱ」のように私も死ぬしかなかつた。しかし、そういう自分語りはどうでもいい。焦土から復興した後をぬくぬく生きる者の甘つたれた感傷に過ぎない。問題は、他者であり、外部である。それはボックス・カー機長スウィーニー少佐であり、搭載原爆責任者アツシユワース少佐であり、ピーハン爆撃手であり、『ナガサキの郵便配達』の作者タウンゼントその人である。

「いやだ、死ぬもんか、死ぬのはいやだ。」という谷口少年の言葉と、「おい、ビー、おまえ、一発でばつちりジャップを十万人殺つたところだ。」というボックス・カー乗務員の言葉を一箇所に書き込むことができるのは、この小説が視点を限定しない自由な三人称で書き進められていることによる。この自由な視点は、被爆者からも原爆を投下した米軍側からも等しく距離を置ける者

にのみ可能なものであり、日本の「原爆文学」においては採用されている例をほとんど見ない。だが、引用部分のような強烈な不協和音（絶対的な他者性の対峙！）を鳴り響かせる効果は、この視点ならではの功德であろう。この手法を、あざとさが目に付く、劇的に過ぎる等々批判することは容易いが、これくらい露骨に二つの声を重ね合わせなければ、見えてこない外部が存在するのも確かであるように思う。

Ⅲ、読書再開。ただし、早川書房版『ナガサキの郵便配達』

教科書に採録された『ナガサキの郵便配達』は、ページ数の関係からダイジェスト版になっている。原文の掲載は、原爆投下前後の部分に限られる。教科書を読みさした私は、ダイジェストに物足りなさを感じていたこともあって、早川書房版で一気に全体を読んでもしまおうことにした。（長崎県内の図書館ならば、常備されており、すぐに借りられる。）

本書の表表紙は、真っ赤な下地に、粗い筆致の白い線描で画かれた、郵便配達用自転車のイラストである。そして、裏表紙は、一面、ピーター・タウンゼントの肖像写真。世紀の悲恋の主人公は、高齢になつても大写しに堪えるハンサムであり、精悍な顔立ちには優れた軍人であったことを髣髴させる。

本書の原作はフランスで出版された『L'ENFANT DE NAGASAKI』（英語版『The Postman of Nagasaki』）である。早川書房版はその邦訳であるが、読み進むうちに、この翻訳がある意味

で特殊なものであることに気がつかされる。原作の大部分は、元々日本語で書かれたり語られたりしたものをソースとしている。その翻訳においては、それをフランス語（英語）から再び日本語に戻す作業をすることになる。日本語↓フランス語（英語）↓日本語という言葉の往復運動は、普通の洋書の翻訳とは異質な作業を訳者に強要してくる。日本を良く知る読者の批評眼に堪えられるよう、原作の手直しが必要になるのである。

実際、「訳者あとがき」を読むと、訳者・間庭恭人氏は、ピーター・タウンゼントが取材した人々に、内容の確認を取り、修正を加えながら翻訳を完成させている。それにしても、文中に出てくる「海征かば」の歌詞などは、どのようなフランス語（英語）になっていたのだろうか。原詩に戻されているのが少し惜しい気もする。「海征かば」が、フランス語（英語）で表記される時、古代日本の語彙や五七調が持っている荘重さは剥ぎ取られ、天皇のためには死を辞さないという、「一億総玉碎」や「神風」を連想させる不気味なスローガンに変貌するのではないか。この作品で、欧米の読者は、「海征かば」を読んだのではない。このスローガンを読んだはずである。

このように見ると、『ナガサキの郵便配達』を、「翻訳」を意識しながら読み進める作業は、フランス語（英語）と日本語という異質な「声」を、重ね合わせていくことでもある。「海征かば」に限らず、昭和天皇の御製や玉音放送、阿南陸軍大臣の辞世などの「日本語」が出てくる度に、それらはフランス語（英語）でどのように表現されるのかを想像し、私は立ち止まった。

例えば、阿南陸相の最期は次のように記される。

クーデターは失敗した。それを知った阿南陸相は辞世の歌を詠んだ。

一死以テ大罪ヲ謝シ奉ル
神州不滅ヲ確信シツツ

そのあと阿南は長時間にわたって酒盃を挙げ、軍刀を腹に突き立て、右一文字に引き切つて、また元にもどした。割腹―もつと恐ろしい自刃の形式―であつたのであつた。

国家の名譽、陸軍の名譽を護りぬこうとした阿南の激しい意志の犠牲者の一人であつた稜睡もまた、自刃する阿南のそれに劣らぬ激しい苦痛に呻きながら、教室に横たわつていた。それまで無感覚だつた、焼けただれた皮膚ががまんできないほど痛み出したのである。(※傍線・田崎)

この部分にも、異質な二つの「声」が重ねられている。阿南陸相の割腹の痛みと、稜睡少年の原爆による火傷の痛みとが直接に結び付けられ、苦痛に呻く「声」が二重に響くのである。この二者の無雑作な重ね合わせは、日本語では思いもよらない表現であろう。この表現は、もはやアイロニカルなものに達している。その中であつて、原詩に戻された阿南陸相の辞世は、どうしようもなく浮き上がつて見えてしまう。

IV. 読了

自由な視点を駆使した三人称小説だが、原爆の悲惨さを告発し、投下責任者であるアメリカ大統領および投下に至らしめた日本軍

部を糾弾する作者の姿勢は、最後まで一貫しており、ブレることがない。作者の思いは「日本語版によせて」の中に全て尽くされている。一九八五年の段階でピーター・タウンゼントは、本書で次のように指摘している。

原爆犠牲者である被爆者たちの訴えには何の新しいさもなくなつている。現在の超大国指導者たちやすべての責任ある国家指導者たちもすでに声高にそれを宣言した。にもかかわらず彼らは一方では、相互に不安と不信の念から、あの呪うべきかかしを誇示しつづけてゆかねばならない、と考へている。

この作品が書かれた背景に、ヨーロッパでも既に失効しつづつた日本語による原爆表現(証言・訴え・文学等)に、新しい生命を吹き込もうとする作者の意志があつたことが覗える。そして、その企図は成功した。早川書房版の表紙見返しには、当時、欧米の有力紙がこの作品をどのように評価したか、レビューの一部が掲載されている。

■ 原爆被災物語はどうしても似たりよつたりならざるをえないが、ピーター・タウンゼントのこれは、公刊史にはないディテールが鮮やかに書きこまれていて最高傑作のひとつ。―オプザーヴァー紙

■ 原爆の恐ろしさと犠牲者の痛みがじかに伝わってくるような雄大な筆致で描き出した感動的な物語 ―クウオンティディアン・ド・パリ紙

■ 美しい長崎の町の余りにも残酷な一被爆少年の証言である。「この人たち(被爆者たち)の苦しみを目のあたりにして、どうしてもこの本を書かないではいられなかつ

た。」と著者は述懐する。―エル誌

■ マーガレット王女の悲恋の相手であつた著者は、今や立派な作家である。原爆の悲惨を伝えて余すところのない本書には、並々ならぬ文才と史眼がうかがわれる。

―マタン紙

■ 長崎の被爆少年を主人公にすえた、厳肅かつ感動的な物語である。著者は原爆投下の最終責任者にトルーマン大統領をあて、この上なく峻烈に批判しているのである。

―フィガロ紙

このレビューを読みながら、私は海外での「原爆文学」受容を思わずにはいられなかつた。一九六九年、井伏鱒二の『黒い雨』が英訳され、好評を博したとされる事実は知っている。また、映画『ゴジラ』がアメリカで人気があつたことも知っている。しかし、私は、それ以上の知識を持たない。具体的にどのような受容されたのかとなると、全く知らない。

原爆被害について、海外の関心は高く、証言や文学作品が翻訳されていることは、幾つかの資料で目にしたことはあつた。しかし、その受容について具体的に意識したのは、この『ナガサキの郵便配達』を読んだからのことである。

ピーター・タウンゼントが「原爆犠牲者である被爆者たちの訴えには何の新しさもなくなっている。」と指摘して、もう二十年が経とうとしている。この状況に向けて「ノヴェル（新しき）」を創り出すことは可能なのだろうか。

V. 二〇〇四年の『ナガサキの郵便配達』

小説の中には、現在の国際情勢に向けて発せられたのではないかという言葉も出てくる。

道徳の見地からすれば、“非人道的兵器”を使い敵国民間人の殲滅をはかることよつて勝利を得ようなどとするこゝは、これが正義の戦争をやると公言した文明国の所業とはとうてい思えないのである。テロリズムそのものではないとしても、それに非常に近いのだ。

これはトルーマンを非難した言葉だが、二〇〇四年の現在、一部のイラク民衆の心中に渦巻く、アメリカ批判を言い当てた言葉として読めるのは驚きである。

最後に

『ナガサキの郵便配達』という本を読んで、考え込まされた。思いついたことをノートにとつていったが、系統だつた内容の、まとまりのある文章に構築するには、あまりに散漫なメモにしかならなかつた。しかし、「原爆文学研究Ⅲ」に必ず寄稿するとう、花田俊典先生との約束は、何としても果たしたかつた。この春、花田先生から頂いたメールは、こう結ばれている。

「次号の原文研と敍説の執筆（田崎さん、あなたが「執筆」するのです）も、くれぐれもよろしく哀愁。HANADA Toshinori」
以前、花田先生は、中々文章を書こうとしない私に、ある酒席で、こう諭された。

「あんた、自分の思いつきば、そのまま書いてみんね。あんた

はお喋りやけん、自分の思いつきば何でも喋ってしもうて満足し
とんしゃあごたる。それは書いてみるとさ。そこから始めてみん
ね。」

今回は、ささやかながらそれを実践してみたつもりである。貧
相な内容ではあるが、自分自身が考えを深めていきたいと思える
種粒が、幾つか見えてきたような気がしている。

『ナガサキの郵便配達』にも記されていることだが、長崎に原
爆を投下したB 29「ボックス・カー」は、予備燃料も尽きたため、
テニアン空軍基地への帰還ができず、占領して間もない沖繩に不
時着している。「原爆」と「沖繩」、花田先生が最後まで興味を示
しておられた二つのテーマは、一九四五年八月九日、ボックス・
カーが辿った軌跡と重なっていたのである。(了)